



# 共立研究

東京基督教大学  
共立基督教研究所  
〒270-1347  
千葉県印西市内野3丁目301-5-3  
TEL. 0476 (46) 1137  
FAX. 0476 (46) 1292

Vol. VII No. 3 2002年1月11日

## 特集 グローバル時代の国際秩序とキリスト教

2001年9月11日に米国で起こった同時多発テロと、その後のアフガニスタンでの戦闘行為は、グローバル時代の新世紀の幕開けの前途多難であることを世界に知らしめた。戦闘行為は下火にはなったというものの今もアフガニスタン国内で続いている(12月13日現在)。

事態がまだ流動的であった11月9日に、われわれはキリスト者市民としてこの問題をどう考えるべきか、シンポジウムをもった(於お茶の水クリスチャンセンター)。以下はその「グローバル時代の国際秩序とキリスト教」と題する共立シンポジウムの記録である。

### 同時多発テロと宗教

稻垣 久和

東京基督教大学教授・コーディネーター

今日のシンポジウムは、3人の先生方に発題をお願いしておりますが、その前に主催者側から、オリエンテーションという形で少し説明をさせていただきたいと思います。3人の先生方は、それぞれの分野でのご専門の方々でありますけれど、今回のシンポジウムの趣旨は、キリスト教の側は、どう考え、どう祈り、どう行動したら良いのか、そういうことについて、特にサジェスチョンが与えられるようなものにしていきたいということで企画いたしました。

あえて「キリスト教」ということを持ち出しますのは、日々、テレビや新聞等々で報告されています様々なニュースの中に、「これは宗教戦争だ」「キリスト教対イスラム教」という図式で見るものが目に付きます。しかし私たちは、「そうじゃないだろう」

「それは違う」そういうふうな思いをこめて、じゃあ、どこがどう違うのかを少し考えなければいけないということを思っていたわけあります。

### 目次

#### 特集 グローバル時代の国際秩序とキリスト教

同時多発テロと宗教	稻垣久和
アフガン難民に対するNGOの働き	浜田文夫
国際社会学的な断片的コメント	宮脇聰史
bin Laden 「革命」が現代に問いかけるもの	東條隆進
発題者の間の討論	

今、要点を三つに絞って少し説明したいと思います。まず、イスラム教ということについて私たちはどう捉えるかということがひとつ。それから、イスラム教対キリスト教という図式が作られている背景について。最後に、ではキリスト教をどう捉え、どう考えるのかということについて、ということです。

今回のテロ事件、これは、イスラム教の中でも極めて少数者の過激なグループが起こしたテロリズムということを、まず押さえておかなければいけないと思います。大多数のイスラム教徒が、このような残虐非道なテロ行為を非難したということでありました。少なくとも空爆が始まります10月7日まで、イスラム教国をも含んだほとんどの国々が、このテロ組織に対する包囲網を形成することに躊躇がありませんでした。ですから、私たちは、イスラム教というのは野蛮で過激な、そういう宗教なのだ、非常に好戦的な宗教、というイメージを持ちやすいのですが、その先入観を捨てることから出発したいと思います。日本のマスコミにも比較的そういう見方が多くありますし、また日本のキリスト者の中には、逆に却って、そういう意識を持っている方がむしろ多いということも、また、しばしば経験していました。

歴史的に、イスラム教という宗教は、ユダヤ教、そしてキリスト教と一緒に存在してきた宗教であります。皆さまの手元の資料の中に、私が『講座・現代キリスト教倫理4・世界に生きる』(日本基督教団出版局、1999年)に書きました論文のコピーを入れました。「世界の諸宗教、文化との共生——宗教間対話の視点から——」を御覧ください。「2、イスラム教」というところを抜粋致しました。イスラム教というのは、第1行目にはありますように、十字軍、かつての歴史的な事件、を持ち出すまでもなく、キリスト教との間に抗争・対立のイメージがあるわけありますけれど、もともとこの宗教は、「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはその使徒である」との信仰告白を掲げている、いわゆるイスラム共同体(ウンマ)というものを絶対視する、そういう宗教であります。しかしながら、ユダヤ教、キリスト教のことをいわば「啓典の民」という言葉で呼びまして、7世紀にイスラム教が成立して以来ずっと、人頭税(ジズヤ)という形で、少しイスラムより高い税金を取りながらですけれども、共存してきたのであります。生命、財産の安全も保障されていたのであります。

ところが、今世紀になって、イスラム教は、ムスリム諸民族の連帯と西洋植民地主義に抵抗する「闘

争イデオロギー」という面で再編されたというところがあります。いわゆる政教一致を掲げて、特に過激派、タリバンなどについて書いているものを読みますと、非常に「回帰」という意味の原理主義が強いのであります。

こういうところから、われわれがキリスト者として彼らと平和共存をしたい、しかし平和共存していくには、どうしても対話が欠かせないのですが、その対話の糸口を取るのはなかなか難しいという現状があります。しかしながら、彼らの中にも、いわば、イスラム教の中に視点を置きつつも、ユダヤ教、キリスト教というものを、それなりの位置づけをしていこうという学者が、昔も、そして現代もいます。具体的にその資料中に挙げたひとり、エジプトのアシュマーウィという人の説ですが、そこを読んでいただきますと、「最初の預言者（アダム）から最後の預言者（ムハンマド）に至るまでの完全な宗教」これがイスラームである、その中に「シャリーア」、これはイスラム法のことでありますけれども、これを独自の立場から解釈していくというイスラム学者もいるんですね。彼によりますと、モーセのシャリーア、これは義務である、イエス——彼らはイーサーと呼ぶんですが——イーサーのシャリーアは愛である、ムハンマドのシャリーアは慈愛である、そんなふうな形で、それぞれトーラー——これは律法のことですが——福音書、コーランといった啓典として結実した。そういう包括主義とも言うべき立場に立つイスラム教学者もいるわけであります。ですから、こういう人たちもいるということを考えれば、われわれは、共存共栄、平和的に共存する、という意味での対話を全く不可能と考えることはないと私は思います。

それからもうひとつ、さらに突っ込んで、最近イスラム学者による『文明の対話』(共同通信、2001年)という本の翻訳が出版されました。著者は、ムハンマド・ハタミ(Mohammad Khatami)、御存知だと思いますが、イランの現職の大統領ですね。これは、共同通信社から最近出た翻訳でありますが、ハタミ氏は、さらに突っ込んで「対話」ということを前面に押し出しているイスラム学者であり、また政治家であります。ちょっと興味深いんですが、この本の最初に「親愛なる日本のみなさまへ」ということで序文がありますので読ませていただきます。

対話は、真理へ到達し、他者を理解するための方法です。ですからそれは思想や見解、また社会や国際関係の領域でも重要な意味を持ち、特別に位置づけられています。対話が、語り、かつ耳を傾けるという意味である限

り、共通の言葉が現れ、それによって共通の思想が発展し、その共通の思想によって人類の苦痛を取り去るための、共通の努力がなされることになるでしょう。

対話の基礎であり、それを永続的に保証する倫理や思想や、あるいは対話する者同士が相互に抱く尊敬の念は、対話の重要性を認める宗教や教義が尊重すべき二つの基本です。われわれの教えであるイスラムは、“叡智”と“確固たる知”をすべての呼びかけや対話の基礎とみなしています。

そして最後に「慈悲深く慈愛あまねくアッラーの御名において——サイード・ムハンマド・ハタミ」こういうふうに署名がしてあるんですね。ちょうど今日、そして明日でしょうか、ニューヨークで行われている国連総会で、このハタミ氏もまた演説をするということでありますから、どういう演説をするか、大変興味があります。「文明の対話」ということを非常に前面に押し出しているイスラム学者、かつ政治家であります。

【参考】2001年11月10日朝日新聞夕刊「米英の武力行使 やんわりと批判 ハタミ大統領」と題する記事の全文

【ニューヨーク 9日＝五十嵐浩司】「報復が必要との考え方、力に対する誤った感覚と一緒にになったとき、子供や女性、老人などアフガニスタンで死に直面している人々の叫びが聞こえなくなる」。イランのハタミ大統領は9日、国連の「文明間の対話」総会でこう指摘し、米英軍によるアフガンへの武力行使をやんわりと批判した。

ハタミ氏は、米国に対するテロ攻撃は「虐殺や惨劇でしか反対の意思を表明できない狂信者によるもの」と強く非難した上で、こうした批判をにじませた。テロは「非人間的で反イスラム的」とまで言い切っている。

そのうえで、公平と正義を実現することがテロを根絶やしにする方策と指摘し、「反テロ・サミット」の実現を強く促した。

従って、テロリスト・グループの極端な主張を真に受けて、「これはイスラム教対キリスト教の対決だ」という形に持ち込まないことが大事だと思います。ややもすると——例えばすけれども、ブッシュ大統領が9月16日に演説した中で、クルセード（十字軍）などという言葉を不用意に使ってしまったということがあります。これはまさに——少數、ごくごく過激なテロリストが持っている思想の構図といいますか、思想の図式の中にまんまと乗っかってしまったというふうにも言えるのではないかと思います（米国内にも700万のイスラム教徒がいる）。無差別テロというのは、アメリカを今、標的にしていますけれども、実は色々組織が複雑に入り組んで

いて、エジプトやサウジアラビアなど、いわゆるイスラム教国の主要な政治家をもまた標的としているという構図があります。これは結局どういうことかと言うと、世界の不公平、それは経済的な富の偏在から来ていると

いうことがひとつあると  
思いますが、そういうものが20世紀になってどうしようもないところまで行ってしまった。いわゆる「南北」の経済の富の較差、それだけではなくイスラム教国の中でもいわゆる専制政治であるとか、独裁政治であるとか、非民主的な政治形態のゆえに富の較差が広がってしまった。そういうことに対するテロリストたちの、ある意味では抵抗というふうな見方もできるかと思います。

さて、ではキリスト教の側が、これをどう考えていくかということですが、キリスト教には、昔から「正義の戦争」（Just War）という考え方が、伝統的にありました。今回私もちょとびっくりしたんですが、こういう思想は20世紀でもう終りだろう、そう思っていましたら、また、アメリカのキリスト者の中には、Just Warというものを掲げるグループがありまして、びっくりしたのです。正義の戦争、これはアウグスティヌス以来ずっとある、キリスト教の伝統でした。五つの原則が、この中にあります。ひとつは、正しい原因がそこにある、正義の戦争に至るまでに、正しい原因がある。2番目、正しい意図がそこにある。3番目、これは最後の手段である。4番目、合法的な権威が伴うべきである。5番目、成功の合理的な希望がある。さらに、戦闘行為が始まると、その中にふたつが付け加えられまして、6番目、非戦闘員は攻撃しない、7番目、それ相当の攻撃であること（相応性）。この七つが、だいたいこれまで Just War といわれているキリスト教の伝統の中にはあったのですが、果たしてこれが今回の戦闘行為においてどうなのか。3番目「これが最後の手段であった」というところにおいて、私は少し疑義があると思いますし、それから、5番目・6番目・7番目においては、なおさら、これは今、疑わしいものになっているのではないか。と申しますのは、アフガンの中の一般市民に多数の死傷者が出て、100万人を越える難民が——今すでに100万、200万いる上に、加えて——周りの国々に流れ出す、病気も流行る、死と隣り合わせでこれらの人々が生きる、



稻垣氏

教育を受ける権利も奪われる、そういう状況になってきているからであります。

キリスト者はどう考えるべきか。ひとつは、プロテスタントの歴史の中に出でてきている「教会と国家の分離」という思想を、私たちは基軸に考えたいと思っています。Separation of Church and State、教会というものと国家というものが機能的に分離される、そういう思想が持っている豊かさというものを基軸にして、私たちは、教会、キリスト者の群れとして、この問題を考える。国家サイドで考える必要は、さらさら無いというふうに思います。これは、キリスト者が国家に無関心になるということではなく、市民として発言、行動し、国家政策にも影響を及ぼしていこうということです。

2回の大戦を経験した20世紀は、国連憲章の中で戦争を禁止し、報復権も認めていません。キリスト教史上に議論された「正義の戦争」という曖昧な概念は、20世紀半ばに、一応「個別的自衛権」の行使という形で国連憲章51条の中に結実させています。しかしキリスト者市民の側は、国家が戦争行為をとろうとするときには、その犠牲を被る各国の市民と連絡を取り合いつつ、戦争をやめさせるために働くべきです。また今後、お互いの平和的な共存のためにイスラム教市民とも対話していく積極的姿勢が必要です。これは宗教的真理論争のためではなく、地上の生涯を互いに平和的に生きていくためにです。国連憲章2条3項「すべての加盟国は、その国際紛争を平和的手段によって国際の平和及び安全並びに正義を危うくしないように解決しなければならない」2条4項「すべての加盟国は、その国際関係において、武力による威嚇または武力の行使を……慎まなければならない」とあるように。

日本のキリスト者は、ジャーナリズムが書き立てるような「キリスト教国」といった擬似キリスト教化された国家イデオロギーに惑わされてはなりません。聖書が告げるメッセージは、旧約から新約への流れの中で、「神の国」の実現は結局は目に見える民族・国家の中では達成されることではなく、靈的なものであること、「救い」はキリストの贖罪を通じた、神と人、人ととの和解と平和（シャローム）であることを明瞭に語っています。国家為政者には国家為政者として委ねられた仕事はあるでしょう。しかし国家だけが公共性を担っているのではありません。市民も国境を越えて公共性を担っているのです。キリスト者市民としての私たちには、私たちとして委

ねられた使命があるのではないか。

では、私たちは、どのようにすれば、この地上の生において殺し合いではなく、平和に共存して生きることができるのでしょうか。

今回の米国での同時多発テロと、その後の経過の展開を見るとき、これを「イスラム教対キリスト教文明」の“文明の衝突”としてしまったならば、テロリストの思うつぽとなってしまいます。前述のように、米国大統領がクルセードという言葉を使ったことが、逆に、テロリスト・グループとそれを支持する人々にジハード（聖戦）意識の宣伝に使われてしましました。これでは、テロとその報復という際限の無い殺戮の連鎖が続くのみです。そうではなく「邪悪なテロリズム対“地球文明”」の対決です。“地球文明”とは、多様な差異を抱えながらも、神によって創造された人類の織りなす一般恩恵としての文明ということです。その証拠に、イスラム教国といわれる多くの国々でも、今回の残虐なテロ行為を非難しています。

テロリズム撲滅の目的のためには、今回の“犯罪人の処罰”だけで事は終わりません。永い期間かけてテロを生み出す温床を根絶しなければならないでしょう。また学問的にも、テロに至った歴史的歩みを検証しなければなりません。イスラム教を理解し、いわゆるイスラム教国の(1)西洋諸国による植民地支配の歴史、(2)南側の貧困を生み出す構造を理解し、(3)今後われわれがボランティア活動等を通して彼らを助け、共生していく、そのような秩序を作っていくかねばならないでしょう。政府間の外交のみならず、市民的なNGO活動、隣人愛の実践などのキリスト者の活動が、これらの21世紀の共生的新秩序を作り出していくという希望をもちたいものです。それぞれの専門分野に即して、主として(1)を宮脇先生、(2)を東條先生、(3)を浜田先生に語っていただければと思います。

なおわれわれがイスラム教の教えの中味や、その宗教思想への注文をつけるわけにはいきませんが、少なくとも侮蔑と憎しみと殺し合いではなく、お互いの信仰の平和共存が可能な方向への神学思想の模索も21世紀には必要であります。これがキリストの福音を語ることと矛盾しない、とわれわれは信じるのです。

[本稿「同時多発テロと宗教」は、シンポジウム当日のオリエンテーションに一部補筆]

# アフガン難民に対する NGO の働き

浜 田 文 夫

日本福音キリスト教会連合みずほ台キリスト教会牧師

## 歴史的背景

こういうお話を致しますときに、いつも「アフガニスタンがどこにあるか」ということから説明をしなければなりませんでしたけれども、今や、その必要がないほどに、毎日その場所がテレビなどに出てくるようになりました。そういう意味でアフガニスタンが有名になったということは、嬉しい反面大変残念だと思っています。アフガニスタンでの戦争はもう20年以上続いていると言われます。この場合、1979年、ソ連軍がアフガニスタンに侵攻してから数え、冷戦時代、アメリカの代理戦争と言われました。しかし、アフガン人たちに話を訊いてみると、この戦争はもう何百年も前から続いている戦争なんだ、と言います。本日は、時間の関係でこの国の歴史の背景を詳しくお話することはできませんが、民族同志の争いがずっと繰り返されてきた。民族同士というよりはむしろ、国同志が争いを続けてきました。西にペルシャ、東にインド、ムガール等、北にウズベック王朝、そのような国々がいつも争いをしながら、勢力を拡大しようとして参りました。イギリスは、今のパキスタン・アフガニスタンの間に、国境を設けました。ちょうどアフガニスタンとパキスタンとをまたいでパシュトゥン族という部族が住んでいますが、このパシュトゥン族が真っ二つにされ、パキスタン側のパシュトゥン人、アフガニスタン側のパシュトゥン人というように、二つに分けられてしまうという事態が生じたのです。これがパキスタンの人たちがアフガン人を助けようとする背景です。パキスタン人、というより、パシュトゥン族が、アフガンにいる同じパシュトゥン族と思うのは当然のことです。

この国の歴史を見ていきますときに、私たちが言ういわゆる「国家」という概念を、この人々は多分持っていないだろうと思っています。ひとつの国としてこの国をどうやって立ち上げていくかということを彼らはあまり考えていない。彼らは自分たちの国のこと、「故郷」と言います。「国」という言い

方ではなく、自分たちの「故郷」と言う。その場合、パシュトゥン族の人たちにとってはパシュトゥン族の人たちが住んでいる地域、住んでいた故郷のことであり、あるいは他のハザラやウズベクといった民族の人たちにとっては、自分たちが居た、その所を自分たちの「故郷」と呼んでいます。

## クエッタのクリニックと学校

私たちが一般に考えます戦争は1979年12月にソ連がアフガニスタンに侵攻してからのことを考えます。このときパキスタンに300万人の避難民、イランに200万人の避難民、合わせて500万人の難民は世界最大の難民であると言われました。私は当時、アフガンの難民の人たちに対しまして、パキスタンのバルチスタン州クエッタという町、最近では大変有名になりましたが、この町で始まりました小児科のクリニック、それから、難民たちの学校の働きに関わるようになりました。ひとりの日本人が、どうしても難民たちのために病院を作りたいと言って、日本人のクリスチヤンや医師、牧師に声をかけましてこの働きがスタートしていきました。これが1987年のことです。この後クエッタにありましたクリニックは、今アフガニスタンのカブールという首都に移りまして、そこでマラリヤ、リシュマニアという皮膚病、いずれも現地の病気ですが、それを専門とするクリニックを今も戦争の中、カブールで開いています。

クエッタで始めましたクリニックの庭に小さなテントを張りまして、その中で学校を始めました。初めは30人くらいの小さな学校で小学校1年生から3年生までが勉強していました。難民はパキスタンの公立の学校に入ることができません。難民ということで受け入れてもらえないのです。私立の学校がありますけれども、これは非常に授業料が高い。しかも彼らが喋っている言語とは違う言葉を使います。彼らはダリ語というペルシャ語系の言葉を使いますが、パキスタンの人々はウルドゥー語という言葉を使います。そこで教育を受けますと、考える言葉



浜田氏

がウルドゥー語になってしまい、それが私の仕事になります。私が直接この働きに関わりますのは1991年からです。主にクエッタの学校の働きに責任を持つことになりました。この頃から中学校がスタート致しまして、生徒数も400人から600人、ものすごい勢いで増えてきました。小学校を卒業した者が当然進学したい、そこで中学校ができ、そして高校ができました。今、5回目の卒業生を送り出しています。さらに大学も作ってほしいという要望が出ていますが、まだ実現に至っておりません。中学・高校を作っていくのは、小学校の学年をひとつ増やすのとは違います。小学校というのではなく、ひとつ学年が増えれば先生をひとり増やせばよいのですが、高等教育は専門の先生が必要で、それだけ人件費がかかってきます。現在、1300人の生徒たちが勉強しています。小学生が800人余、中学生が300人余、高校生が150人、教師が49人おります。これら教師も全部アフガン難民の人たちです。この人たちに仕事を与えるということも難民への助けにもなっています。

#### タリバーン政権下での教育事情

タリバーンという政権ができまして、アフガニスタンを支配するようになりましたのが1995年頃ということです。この頃からアフガン国内の教育事情はさらに悪化してきました。アフガニスタン国内にありました高校や、あるいは大学——細々と機能していたような所ですが——そこも次々と閉鎖されていました。あるいは実際に機能を果たさないというケースが多いようです。そして有名になりましたように、女性の教育は禁止されました。タリバーンがカブールを占拠した後3ヶ月の間に63校の学校が閉鎖されたと言われています。こんなに学校があったのかと思いますが、これは私塾——先生の経験がある人が自分の家を開放して教える——、そのような小さな学校も含めてということです。女生徒10万人以上、男子生徒14万人以上の人たち、教師1万1,200人、この人たちが学校で学ぶこと・教えることができなくなりました。先生のうち、女性は7,800人いたということあります。現在、少女のうち10人に9人が学校に行っていない。また少年3人のうち1人が学校に行っていない、そういう状況があります。そのようなタリバーンの支配の中で、新たに難民とし

てパキスタンにやって来て、「クエッタに学校がある」ということで人々がクエッタにやって来る、そして高校や中学に編入してくる人たちもあります。

#### 高等教育の必要性

現地の人たちの要求で始まった高校教育ですけれども、やがてやっていくうちに、初等教育だけでは不十分であるということに気がつきました。基本的にアフガニスタンの学校は本の丸暗記が中心になります。ですから、掛け算の九九の意味がわからなくても、とにかく小学1年生が片っ端からそれを言って見せるけれども、応用問題を生活の中ですることが、あまりできません。あるいは、文字にてもそうですけれども、文章全部を丸暗記するように何回も繰り返します。けれども違う文章を見せたときに、すらすらと読むことができるかというと、そうではない。ですから「僕は小学校まで出たから字が読める、書ける」と言っても、新聞を読めるかというと、必ずしもそうではない。それから戦争が長引く中で、多くの知識階級の人たちが命を落として行きました。例えば官僚。政権が交替する度にその時の官僚が殺されるか逃げて行くということが繰り返されました。医者や技術者、あるいは教育者といった人たちが、どんどんなくなってしまいました。では、次世代の知識階級の人々を育ててきたかということですが、当然それはできないできたわけです。このような知識階級の空洞化が起こる。そういう危機感をアフガン人の知識階級の人々が抱いている。自分たちで、何の援助が無くともとにかく大学を始めたい、技術者たちを育てていかなければならないということを言っています。そのように、アフガニスタンでは、もっと高い、充実した教育が必要になってくるのではないかと思います。発展途上国での教育援助というと、普通、識字教育が優先されるわけですけれども、今、それだけでは到底間に合わない、もちろんそれも必要ですが、それだけでは間に合わないという状況があります。

#### 「燈台」の学校

この「燈台」の学校は、イスラム教国では非常に珍しいですが、男女共学です。女性教師も全体の3分の1雇用しており、女生徒が来やすいようになっています。それから、いろんな部族の人たちが混ざって勉強しています。ですから、部族同志の喧嘩が無いわけではありません。歴史の授業が大変で、虐待した側の歴史と虐待された側の歴史は解釈が随分違います。それをどうやって教えるかは大変なこと

です。あえて特定の民族にあまり偏らない、いろんな民族の人たちを入れるということを行っている訳ですが、この教室の中で皆さんが平和を作ることができなければ、平和な国を作り出すことができない、ということを言います。平和を作ることを第一に学んで欲しいということを言っています。

それから宗教・思想という科目が無い。これは、イスラムの学校ではありえないということです。学校とはイスラム教を教える場所ですが、それを、教えない。シア派やスンニ派いろんな部族が混ざっているので、それを教えますと喧嘩になってしまふことがあります。それは一つの口実でありますけれども、宗教は家で学んで下さい、学校は純粹に学問を学ぶところであると言っております。そういうことにまわりから反発が無かったわけではありません。タリバーンの事務所から呼び出しを受けて、「どうしてお前の所では宗教を教えないのか」あるいは「どうして男女共学なのか」ということで説教されるということがあったようすけれども、学校の責任者はハザラ族という人たち、これはタリバーンの中にいますパシュトゥン族から大変虐待された、仲の悪い部族ですから、タリバーンに呼び出されるとちょっと怖い。学校の父兄の中のパシュトゥン族の人たちが代わりにタリバーンの所へ行ってくれて、「お前たちおれたちに何してくれた。この人たちはちゃんと学校を作ってくれて、自分たちに教育を与えてくれている」と、逆にタリバーンの人たちをたしなめたという話もあります。あるいはムラーというイスラム教の教師たちが、モスクで金曜日になりますと、説教をします。説教をして、そこで人々を扇動して、その後はデモ隊となって町に流れて行ったりという場合があるわけです。ムラーは、あの学校はイスラム教を教えていない悪い学校だということを説教の中で宣伝いたしました。そうしますと、それを聞いていた住民の人が逆に、あそこは良い学校だと喜んでくれた、こともあります。一般的の学校よりも良いものを提供するということを心掛けてきましたので、現地の人々からもそのような評価をしてもらえたと思っています。イスラム教の国の中で、この学校はいろんなマイナス点がありますけれども——男女共学であるとか、宗教を教えないこともありますけれども——、それにも優って、良いものを作っていくということを心掛けております。その甲斐あって町で一番の人気の学校であると言われています。アフガニスタンから難民としてでなく、留学生として、あそこに学校があるから行こう、ということで、わざわざやって来る

人もいますし、入学するのに2年間も待ったという人たちもあります。

### マドラサの弊害

皆さん御存知のタリバーンは神学生という意味だと言われていますが、この神学校は、マドラサと言われて、モスクの中の寺小屋のような所です。そこでイスラムのことを教えるわけです。教育と宗教が一体化したような所ですが、基本的に全部寝泊りができる、しかも食事がついて「ただ」という所です。そして貧しい家庭の子供たちや戦争の孤児たちが行く。そういう、学校に行けない子供たちが見せかけだけでも教育を受けられる唯一の場所が、このマドラサだと言われています。このパキスタンにもありますし、そこにアフガン難民の人たちが入っている。同じパシュトゥン語でやっているマドラサがありますが、そこで勉強した人たちがタリバーンになる。ですから、ちゃんとした教育を受ける場所があれば、このようなタリバーンを生み出さずに済んだかもしれないということです。私は先週パキスタンから帰って来ましたが、たくさんの人たちがまた新しい難民としてやって来て、燈台の学校に入れてくれと言って来ました。そして、緊急ということで生徒を300人ほど増やすことを決定致しました。こういう人たちがマドラサに行って、新たなタリバーン二世・三世を作り出していくことになるということを学校の先生たちも心配しているわけです。

### これからの援助

世界の内戦の中で、どの国よりもアフガニスタンの戦争では子供たちが戦争に巻き込まれたと言われています。すべての軍閥は少年を使いました。一部の少年は12才ぐらいです。その子供たちがソ連製の銃を抱えて戦いに出て行きました。どうしてかと言うと、そうする以外に方法がない。彼らは家族を持ったり教育を受けたりする希望がない、兵士になる以外に職もない、そういう孤児たちだとも言われております。そういう人たちに教育の機会を与えていく、そしてさらに言えば、そういう人たちがちゃんと生活できるように、戦争孤児や寡婦たちを救援していくことが必要になってくるのではないかと思っております。学校を卒業した生徒たちの中では、看護婦になった人、あるいは学校の先生になった人たちもいます。そうした意味で、彼らに新しい仕事を与えるチャンスにもなっているわけです。

これからも、さらにそうした援助が必要になっていくのではないか。多くの国々の援助というのは、

自国の国益のために行われてきました。これを助けることによって自分たちにどれだけ益があるか、と。そして益が無いと分かると見捨てられてきたのです。私たちクリスチャンは、自分たちの利益のためでは

なく、彼らの隣人となることを通して、本当に彼らとの間に信頼を築き、彼らの必要に応えていけるのではないかと思っています。以上で私の発題を終ります。

## 国際社会学的な断片的コメント

宮脇聰史

東京基督教大学専任講師

### はじめに

私の発題では、アメリカ同時多発テロ事件以降の国際情勢の変動を踏まえつつ、ここから、少し見方を変えて、国際問題をめぐる諸問題についてごく基本的な位置を示せねばと思っております。特に国際関係論ということで、今、浜田先生からお話しいただいたことから見ますと、かなり距離を持った形の見方になることをご了承下さい。

現代は情報化の時代であり、私たちは情勢に関する十分な情報を判断材料、「答え」を手に入れられるのは当然という権利意識を持っています。しかしここに落し穴があると思います。人間には、特にリアルタイムで起こっていることに対して神のように情勢を総合判断し、正邪を決定する能力も権利も無いと思います。従って、最初に、私たちの情勢理解も、また将来の予測も極めて不完全であるということに留意すべきです。論壇などには非常に自信に溢れた極論や性急な判断が溢れているように見えますが、私たちは、そういう意味で、慎重に「待つ」姿勢を持つ必要があると思います。

### 1. グローバルな世界の持つ「多様性」と「象徴の幅広い共有」

ハンティントンの『文明の衝突』という本が話題になりました。さまざまな評価がありますけれども、近代の国際関係の仕組みが、(近世までの)「大文明」の解体の上に国民国家を土台にできたことを考えると、そこであえて国家を超える「文明」というものを問題にしたことに着目すべきでしょう。過去に存在した、例えばイスラム教世界の宗教的な象徴が、復古的な思想の流れと、そして情報化・交通手段の発達に伴って、再び力を得ている。同時に、その「文明」は「一体」とは必ずしも言いきれない。例え

ばイスラム思想自体、伝統主義、神秘主義、復興主義、近代主義など多様な流れがありまして、しかも、それぞれのイスラム社会や国が辿ってきた歴史、そこにある政治支配、経済の状況、外国との関係、民族構成と抗争、植民地経験など、さまざまあります。つまり共通の文化的・宗教的シンボルを共有する、いわば「文明圏」とも呼ぶべきものがあるわけですが、それが、例えば「アメリカ帝国主義」であるとか、「イスラムのラマダンには空爆を止めなければいけない」といったような言葉に刺激されやすい。それぞれの地域のそれぞれの生活の中で、意味付けられ、それぞれの文脈の中で激しく反応が起ることになります。

浜田先生のお話からも明らかと思いますが、アフガニスタンの場合を考えますと、大国の狭間で翻弄されてきた歴史、複雑な多民族的な構成と、民族間の長期紛争、そこに生じた難民、厳しい自然、飢餓の現実などの文脈があって、それを無視してイスラムについてだけ考へても、あまり意味が無いという状況があります。しかし、ここに、イスラム復古主義ないしは原理主義の闘士というアイデンティティで、いわば文脈を飛ばした形で、「サウジアラビア出身の bin Laden」「イスラム教」「反米」と言い、「ジハード」を宣言するとき、また、アメリカの空爆が、「富裕を極めた異国の大国による、極度に貧しいイスラム教国への攻撃」という構図をとて提示されてしまうとき、それぞれの地域の文脈で、それらの象徴的な言葉が共振作用を惹起すということが起こります。しかし、しばしば、アラブ諸国におけるデモなどは、実際には、いろいろな側面がありますが、例えば、政府への抗議行動など、地方的な性格をも濃厚に持ったものであります。

イスラム教、そしてイスラム世界に普遍的な共通

項というのは、もちろん大いにあるわけです。先程稻垣先生が御指摘下さったような事柄もあります。しかし、同時に、過度に一般化して、「イスラム教は女性を重んじる」とか、あるいは「差別する」とか、「イスラム教徒は寛大だ」とか、「排他的だ」といった議論の仕方というのは、大雑把には、あるいは特定の文脈では意味を持つ場合があるにしても、実際にはイスラムはさまざまなり方があって、単純な言い方はしばしば“イスラム”という名前のもとに、何か特定のイデオロギーを主張する、そういうときに、イスラムという名前を使って喋るというような形で用いられやすいわけです。もちろん、ビンラディンの場合も過激な思想を正当化するために、こうしたことを用いたりするわけです。これは同時に「文明社会」というものを留保なしに語るような粗雑さと、どこか通じ合うものがあるかもしれません。以上が1番目の点です。

## 2. 「象徴」をめぐる争いの問題

2番目に、象徴（シンボル）をめぐる争いの問題があります。戦争一般に情報戦が重要なのは言うまでもないのですが、国民や国際社会の支持を受けるためにも、自らの正当性を示す必要が出てきます。そのために、特に戦争の情報の操作がどうしても必要になってきます。これもまた、情勢判断を困難にしている重大な要因であると思われます。

冷戦後、湾岸戦争で多国籍軍を主導したアメリカは、いまや唯一の超大国として、富と、自由主義、民主主義、そういうものを象徴する存在であるとともに、その裏にある仮借ない国益の追求者としての姿、帝国主義者としての姿——そのためには最も貧しい国さえ犠牲にしても構わない——という、さまざまなシンボルを体現する存在になりました。それは、超大国であるがゆえ、そのシンボルの力は非常に強いものがあります。このアメリカ自身の超大国としての象徴性、シンボルとしての姿を明るい面から理解しようとするか、それとも暗い面から理解しようとするか。そうしたシンボルやイメージをめぐる争いというものが国際関係の中で出てくるのです。それは、例えばタリバーンが提起した「ジハード」というものを認めるのかどうか、空爆を「報復」として理解するのか、攻撃をタリバーンに対するものと見るのはアフガンへの攻撃を見るのか、タリバーンはイスラム原理主義なのかそれともテロリストなのか、といった問いと絡んでさまざまな緊張関係を生み出していったのです。そもそも9月のアメリカ連続多発テロの特異性とは、そのシンボリックな

性格にあります。これまでのテロと比べるならば、これまでのテロは、特定のイシュー、特定の事柄に対するメッセージ性がかなりはっきりしたもののが多かったわけです。しかし、今回は犯行声明があったわけではなく、また、テロの背景に



宮脇氏

あると言われているパレスチナを攻撃したわけでもなく、あるいはサウジアラビアの米軍基地を攻撃したわけでもなく、それらと必ずしも直接結びつきを持っているかわからない。アメリカの富と軍事力のシンボルを破壊し、しかも民間人を多数犠牲にしました。言ってみれば、「アメリカ国家」という抽象的なものを狙って、大きな衝撃を与え、アメリカ側を戦争する態勢に追い込んだという点で、このテロは戦争に準じた——テロと戦争は違うのでありますが——、非常に戦争に近いというのは、一面でそうであろうと思うわけです。「文明の衝突」でなくて「文明の摩擦」と言ってしまえば非常に印象的に存在すると思います。しかし、その摩擦状態が存在する中で、ビンラディンの行動は、イスラム的というよりテロリスト的であったわけですが、同時に、多くのイスラム教徒のアイデンティティないし感情を呼び起こさせるだけのイスラム教的な象徴を操ることになっています。

私たちは確かに、これらの象徴の問題をひとつひとつ解き明かして行く必要があると思います。しかし、超大国の政府とこれに対抗する勢力が、全力で情報操作戦を展開している状況があります。そうである以上、その判断が難しいということは常に頭に入れておく必要があります。もちろん、当事者性が高い政策決定者などは、政策的判断を展開していくことが当然あるわけです。そして私たちも国民、あるいは国際社会の一員として監視し、ときには大胆に判断し、行動すべきかもしれません。しかし、まずは、もっと対人的な、例えば、私たちの身近なイスラム教徒たちに対してどういう態度を取るのか、あるいはアフガニスタンから溢れる難民の問題などに対してどのように関わっていけるか、実際に目に見える形で起きていている課題に関わり始めるということが第一なのではないかと個人的には思っています。

## 3. 現代の国際社会における「正当性」の問題

最後に、やや哲学的なと言うか神学的なと言うか、

そういう要素を含んだ視点を紹介します。それは、現代の国際社会における「正当性」の問題です。抽象的な言葉ばかりですみません。正当性のひとつの源泉として「秩序」の問題があります。現代の基本的な国際秩序を、アメリカ中心の自由主義システム、そして国連を媒介とする代表性の伴った国際関係、その二つが——アメリカ型、国連媒介型というのを並行していると考えるとして、それに代わる秩序をどう建てるか、そのことを考えずに、やみくもにこれらを破壊しようという行為は、「秩序」という観点から見ると悪であるということになるでしょう。これがひとつの問題です。

そして「秩序」に関連しては、タリバーンが、長期にわたる内戦の地アフガンに、ある程度の秩序回復を行ったということ、しかし、秩序破壊者であるビンラディンを引き入れて、結局、空爆を受ければ苦しむであろう国民の保全よりも、ビンラディンを大切にする選択をした——どういう文化的な背景があるにしても——、そのような貧困にあえぐ国民の無頓着な、ある意味で、責任を果たすということに関して放棄したという側面を持った選択、そして、現状の空爆に伴うさまざまな難民の多方面にわたる苦しみを考えるときに、アフガニスタンにおける秩序の再構築の問題は緊急で不可欠なものであります。

しかし、秩序の問題に伴うイシューとしては、犠牲ということが出てくると思います。犠牲をどこまで許容できるのか。そもそも、犠牲というものを許容していいのかという問題が出てきます。先程の「正戦」という事柄と関わってくることであると思いますし、神学的には「正戦論」は、そろそろ克服される時期が来ているということですけれども、国際政治のレベルでは必ずしもそうとは言い難い状況があります。非軍事的な秩序維持には当然限界があります。そして無秩序を生み出す人間の対立、自己中心、憎悪、相互不信、憎しみの連鎖は重く、暗く、ときには平和主義では手に負えない闇を抱えています。「話せばわかる」、そういう相手は少なくないのですが、対米連続テロ事件は「対話」という言葉を空しくしてしまう出来事であったのではないでしょうか。しかし、断固たる処置を探るとして軍事行動には犠牲は避けられません。戦闘における死もあるわけですし、非戦闘員が空爆の犠牲になっているのは御存知のとおりです。また、難民が現れる、飢餓の問題が既に目前の巨大な問題として存在しています。犠牲の重さと秩序の重要性を秤にかけるのは無理であって、それは、人間の命の価値の重さと関係しています。しかし、秩序回復の努力の無いところ

には、多くの犠牲が生まれてきているかもしれないのです。

若干追加しますと、しかし、先ほど稻垣先生が触れられました正戦の条件にもありましたように、ここに秩序が回復する見込みがあるのか。却って無秩序になってしまうのではないか、そういう見通しがつかないような状況であるときはどう判断すればいいのか。非常に難しい問題でしょう。さらに、現実主義と国際的道義の折り合いをどこでつけるのか、そういう問題もあります。あらゆる人間、あらゆる社会、あらゆる国家は、私の信仰理解に立ちますならば、程度の差こそあれ、自己中心と傲慢と暴虐の罪の渦の中にあって、自己正当化していると思います。その闇の現実の中で、もちろん、ためらわずには絶対正義を高らかに唱えるのは問題外であります。特に、政治や国際関係その他の「正義」の問題というのは、実際には、ある種の不正を黙認しながら、より大きく根本的な不正を打ち砕こうという、せいぜい相対的な正義の営みの問題であるはずです。しかし相対化してしまうと逆にまた問題が起こるのは、どこまでだったらしいのか、どこからは主張されないのか、どっちが大きな問題で、どっちが小さな問題なのか、その判断は非常に難しくなるわけです。これがまた国際社会の中での大きな論争を呼んでできていると言うことができると思います。例えば過去に植民地支配を行った列強国に現在の国際政治を裁く資格があるのか。世界各地の紛争にてたらめに介入して、かつて支援したサダム・フセインやビンラディンと今や砲火を交えている、そんなアメリカに「正義」を語る資格があるのか。

しかし、国際正義が相対的なものであるのだとしたら、現在のアメリカの「正義」といえども、相対的に——いろいろなものと引き比べた中で——事態を少しでもましにしていくにはどうしたらいいのか。つまり絶対的な正しい基準に立って「こうやるんだ」という原理に基づく判断は難しいかもしれません、そうではなくて、特に効果の面と関係して、つまり、こういうふうにやったら少しでもましになるのか、ビンラディンの正義とアメリカの正義とどっちを採るほうがましなのか——それはちょっと問題を単純化すぎていますが——、例えば、そのような比較をする。あるいは第三のもっとましな道があるのか、そういう問い合わせられるだろうと思います。

## おわりに

現代の資本主義的世界は、人・もの・情報の流れが大きく、複合的なテクノロジーに支えられた都市

生活を中心としています。この状態は、文化的には不安定であり、軍事的には恐ろしく弱い状態です。つまり、テクノロジーに支えられた都会の活動は、軍事的な攻撃に非常に弱いということです。そのような中で、少数の富裕者が大多数の貧困の世界を政治・経済・文化的に支配する現実と、そこから生じる理不尽への怒り、踏みにじられた屈辱の歴史の中で憎悪を増幅させた人々の暴力への衝動が、そのような不安で脆弱な「現代文明」を揺さぶりやすいという構図が生まれてきます。

9月11日のテロにより、ある意味で私たちの時代

が抱える病が以前よりいくらか見やすくなつたかもしれません。つまり、新しいことが起つたというよりも、これまであった構造・姿が表に出てきたということかもしれない。こうした中で、充満した憎しみを緩和する地道な信頼を育成していくような努力が必要であると思います。また、それに見合つた新しい国際関係の構築への、あるいはルール作りの模索が求められてきます。これは、ひとりひとりの本当に身近な人々との地道な和解の働きからこそ、時間をかけて出てくるのではないかと思います。

## ビンラディン「革命」が現代に問いかけるもの

東條 隆進

早稲田大学社会科学部教授

### はじめに

私は、経済から経済理論を勉強し、その後大学で経済政策論を担当しましたけれども、現在は、経済政策論の土台を見つめるということで、経済社会学という学問領域に移っております。生涯のうちに研究領域を3度変わったというのは、なかなか難しいことでありました。そして今、早稲田大学の社会人大学院生に、職業を持ちながら将来博士号を取得するための指導をしておりまして、そこで経済社会学を担当しておりますが、同時に学部では、経済思想史、経済理論史という科目も担当して、経済学から社会学・歴史学を見ている仕事であります。

40代になりました、私は、神戸ルーテル神学校へ入学し修士課程まで進み、その後アジア神学院の牧会学博士課程を修了致しました。若き日に、クリスチャンで文学をやっている友人が「クリスチャンで経済学者であるというのはミステリーかミステイクだ」と言ったのですが、どうも、自分のことを見ますと、ミステイクに近いかもしれません、私なりに、キリスト教と経済学を、一生かけて繋げている最中であります。

ただ、そういう立場の私から見ましても、今回の出来事をどう受けとめたらいいのか難しく思います。伝統的な学問分野では、この問題を解明できないというのが実際のところです。

### 歴史的過程としての近代——経済社会学の視点

経済社会学に私が学問的に関心があるのは、近代史の流れの中で「豊かな社会を作っていくと人間は幸せになる」という考え方があつても間違ひだと感じているからです。もちろん私たちクリスチヤンの立場から言いますと、「人はパンのみで生きるのではない」という聖書の基本に立っているわけですが、近代国家というものは総じて地上に王国を作り出します。その基本は物質的豊かさであったと思いますが、産業革命以降、1800年代から1900年代にかけて、こういう社会ではどうもまずいのではないか、という意識が出てきました。御承知のように、そのひとりはカール・マルクスであります、1867年、『資本論』によって近代社会のいわば闇の部分を徹底的に明らかにしたわけです。さらに、フランスのデュルケムという社会学者は、貧しい時代に自殺者が出てくると考えられていたのが、どうやら自殺は貧しい状況に生じるのではなくて、むしろ繁栄している大都市に多いということを明らかにしました。しかも女性よりは男性に多い。このように、自殺が起こつくるのは経済的に貧しい状態ではなく、人間社会の関係が、アノミーの状態になつてくる（アノミーというのは、無秩序、アイデンティティが築けないで崩れてしまう）、こういう状態の時人間の自殺がおこるのだ、と。人間と動物の違いは何なのかという問いは、進化論以降いまだに議論されております



東條氏

次元が必要なんだ、ということを主張する経済社会学を、今、私はやっております。

### 自爆とジハード——革命史の流れから

今回衝撃的だったのは、NHK の10時の番組で、あの世界貿易センターが炎上していた、その横を飛行機が飛んで来て、また火の手が上がったのを観たことだったですね。私も最初何が起こったかわかりませんでした。NHK の解説者も「何でしょうね」なんて言って、私は、多分何か、ビルを見てボーっと運転してぶつかったんだろう、位にしか思わなかつたんですが、実は計画され尽くした行動であったわけで、それ以降「自爆」という言葉で説明されましたけれども、ある意味での「自殺」がありました。そういうことから私が非常に関心がありますのは、多くの人々が自殺していく——爆弾テロと言われていますが——、しかもこれを「ジハード」という理念で展開している今の出来事は何だろう、ということです。今日のお話のタイトルとして、「ピンラディン『革命』」という括弧付きで掲げた理由でもあります。

従いまして、これは果たして「革命」として成功するのか、「革命」であるのか、それは分かりません。ただ、括弧付きでありますけれども、人間が自分の命を賭けていく、しかもそれが何かの理由でそういう事態になるのではなくて、ある意味で、根本的なあり方に対するプロテストとして自分の全存在を賭けていくことの凄さを思うわけです。そう思ったとき、瞬時に私の頭に閃いたのが、神風特攻隊がありました。ですから、今起こっていることを一番心情的に理解でき、そして、その空しさも良く分かり、そこに搔き立てられた情熱も、根っこにあるものも一番よく分かるのは多分日本であります。そして今、アラブ諸国の中に、神風に対する尊敬の念が、岡本公三を中心とする日本赤軍への非常に強い共感があるということは皆さん御承知でしょうか。わかりませんが、深いところで、パレスチナを媒介

けれど、はっきり言えることは、動物はしようと思っても自殺できない。人間だけが自殺できる。しかしそれは人間の長所であると同時に人間の病であるということありますから、それをどう考えるか、ということから、人間には「社会」という

にしながら、日本赤軍にまで流れてくる精神史・思想史・革命史の流れと、現在進行している、この出来事との間に、接点があるという類推が出てくるわけがあります。

### プレモダンとモダン

神風特攻現象を惹起した根底にあるのは、まさに西洋近代に対する日本のプレモダン（前近代的）なプロテストであったわけでございます。私がすぐ思い起こしたのは、その運動を指揮した北一輝でございまして、2.26事件に至るすべての——中国革命にも関わり、その後の5.15事件、2.26事件——あらゆる運動に必ず彼が関わったわけでありますが、若き日に『國体論及び純正社會主義』あるいは『國家改造案原理大綱』というのを20代で書き上げて、最期に彼は処刑されるのですが、青年将校を中心として、農民社会の崩壊の中で、生ける地獄といわれる中で、家族が皆いわば餓えに瀕している中で、若き青年たちが軍人として、現実は農民の次男・三男ですけれども、思想的には「皇軍」という、天皇の軍人という武士道精神——最近またもののぶ思想が出ておりますけれども——を根底に持ちながら、最後には神風特攻になって日本が崩壊していったということとどこかで繋がっていく。ですから、このテロ事件は、全体的に見ますと、プレモダンの近代的な体制全体に対するプロテストであるという一面があろうと思うのですね。

もう一点は、岡本公三を中心とする日本赤軍に繋がってくる思想系譜・精神構造と、今回のジハードが非常に深いところで連結しているということあります。では、そういう日本赤軍の精神構造はどこから来たか。彼らの直接の親は、彼らが非常に尊敬している、アメリカ帝国主義に対する中南米の解放を成し遂げていく英雄としてのチェ・ゲバラ、そして彼に影響を与えた毛沢東、そして毛沢東を動かしたレーニン、レーニンを動かしたマルクスという、大きな思想、あるいは現実に20世紀、世界の半分を動かした——既に1991年、ソ連邦の解体として一応は終ったドラマでありますけれども——東西問題と定義されている問題とリンクしています。どういうところでリンクしているかというと、近代社会が作り出したシステムは根源的なところに不正義を抱えているということあります。この体制は絶対的な不正義であるので、これを解決するためには根源的な対抗をしなければならない。そのためには、あらゆる手段を総動員しなければならない。そのプロセスの中に、暴力革命も含む、当然自爆テロというも

のも含む、という論理構成であるわけです。

### 近代世界システムと不正義

近代という世界が作り上げたシステムが、本当の意味でそれほど不正義なのか、どうなのか、ということは今でも議論の余地があります。しかし、今日、世界史的に一応理解されているのは、社会主義——近代世界モデルを克服して作り上げていくという社会主義モデル——よりは、少なくとも近代が数世紀かかって作り上げた近代世界というシステムのほうが正しかったんだと。その極めて理念的なものが市場原理主義であります。そして、その市場原理主義を徹底的に全国家・社会レベルで生きているのがアメリカであり、そしてアメリカのあらゆる思想界であります。

学問的に今でも議論があって、私もそのところを苦闘しているのですが、本当の意味で市場主義が、この地上王国を作り上げるのかという問い合わせ。いや、その根底には絶対的な不正義があると考えるべきなのか。それは、おそらく後世の歴史が明らかにするでしょうけれども、少なくとも日本では、今日に至るまで一応市場主義をモデルにして進んでいるわけですけれども、これに対して絶対的に「ノー」と言っているのが今のイスラム圏であろうと思うんですね。そして、そのイスラム圏もまた多様であり、トルコのようにイスラム主義全部を捨てて、自由統合して、ヨーロッパの近代社会で行こうと決意するもの、ナセル大統領以降、一時期ソビエトとの関係で新しい社会主義を目指したエジプトが、今むしろアメリカ的な市場主義的な方向で行こうとするもの、その中で絶対的に対立する人たち。そういうところと非常に先鋭に対立しているのが bin Laden、あるいはオマルという人が一緒になって進めているタリバン運動でありますけれども、客観的事実はともあれ、今、アメリカで起こっている、しかもその背景にある近代世界というものはトータルに不正義である、邪悪であるということを主張しているわけあります。

### ウサマ・ビンラディンの特徴

今回の出来事を見たときに、社会科学の唯物主義とか、合理主義とか、そういう中で苦闘しないた者たちは、そこまでは大体推測できるわけです。しかし今回の出来事の謎めいたところ、あるいは難しいところ、それは bin Laden という人物の「正義」の背後に、それだけでは整理がつかない問題がある。なぜか。一言で言えば、これは南北問題という枠組

で整理できるのですが、プレモダン、いわゆる日本型の北一輝的な理論にしても、あるいはマルクスからチェ・ゲバラまで来る理論にしましても、そこには、暴力を用いても解放すべき実体というものがあったわけです。貧しい人々を解放し、人民を解放し、そしてアメリカの典型的な帝国主義的なものから解放するんだという理念と現場があったわけですね。

しかし、今回 bin Laden が進めている運動というのは、極めて象徴性の高い、国防総省であり、ホワイトハウスであり、世界貿易センター破壊という、いわゆる思想闘争をしている。それはそれとしていいけれども、ではその中で何を実現したいのか。一体自分たちの解放すべきものは何なのか。 bin Laden はサウジアラビアの石油資本を中心とする——石油資本を今日まで豊かにしているのは、アメリカのまさに産業主義で——その中で、今日まで繁栄し、建設業者として巨万の富を作り上げた家系に育ち、彼自身大学で経済学を勉強したといいます。近代合理主義の思想を持っている彼からして、一体その背後で本当の意味で何を解放しようとしているのか、その実体が全然見えてこない。そして今アフガニスタン全体を巻き込んで、こういう事態を惹起しているわけですが、仮に、アメリカがベトナムのように失敗したとしても、では後に残るのは何なのかということになると、何も残らない。もちろん理念的には、イスラム原理主義復興運動です。イスラム原理主義の人々は紀元7世紀のムハンマドのここまで戻るんだと言っていますが、それは歴史の不可逆性からして、あり得ざることでありますし、価値理念的にもそれは良いことではないということになりますと、では何が残るのか。多分、後世からは「bin Laden 革命」=テロリズムであったという形にならざるを得ないであろうと思います。

ただ、こういう状況の中で、ブッシュ大統領が最初「これはテロである」と発言し、暫くする内に「戦争である」、これはある意味で言語としては——テロならばテロとして対応しなければならない、戦争ならば、近代戦の戦時法規に従って遂行しなければならない——両方とも恣意的に使われている。これはもちろん戦略でありますから、ああいう出来事、6000人の尊い命が一瞬のうちに失われ、しかも今、炭素問題でこういう事態になっていますから政治家としては当然の対応であります。しかし、 bin Laden 「革命」という言葉を使わざるを得なかつたのは、どうも、そういう対応のしかたの中で、問題の本質が見えてこないのでないか、ということが

根底にあります。アメリカ共和党は非常に保守的でありますし、キリスト教界でもファンダメンタルが代表になっておりますけれども、絶えずアメリカ国益主義で20世紀はずっときました。一貫してブッシュ政権の立場——レジュメのライシュ報道官は、ニアアブッシュからジュニアアブッシュの全外交理念の担い手であります——これは徹底したアメリカ国主義であります。ですから私はむしろビンラディン対ライシュの激戦と考えておりますが、こういう根底にある構図というのは、精神構造は両者とも極めて良く似ている。そしてアメリカもまた、イスラム「原理主義」と同じ信念をもって、ほぼ同じことを行ってきたのが現実であります。

### 手段としてのジハード革命

ですから、この問題というのは、後世、確かに間違いない、テロであって、かつイスラムの一部であるということは間違いないわけとして、私も20数年前宗教社会学の観点からコーランを読んで、ほとんど忘却したので、今回もう1回コーランを読み直してみたわけです。もちろんコーランの中には、そのようなビンラディン的なものを示唆する箇所もあります。しかしながら、その根底にあるイスラムの思想というのは、先程もありましたように、啓典の民として、ユダヤ教・キリスト教と、むしろ自分たちは同じだ、という考え方です。ビンラディンが使っている言葉「聖戦（ジハード）」は、宗教を持たない民に対する、特に多神教に対する戦争です。です

から、インドにおいて、ヒンズーとイスラムが同居するということは、ガンジーの悲願にもかかわらず、やはり不可能であったと思います。しかしながら、今回の出来事は「ジハード」として果たしてそれはイスラム的に思想的に成り立つか。ビンラディンが使っているすべての用語は、かなり恣意的である、つまり手段としてのジハードであるということであって、正義という目的を追及したのでありますけれども、根底に、やはり暴力主義、そして暴力を可能にした敵・味方の絶対化があると思います。

### 善きサマリヤ人として

また討論の中で出てくると思いますが、私は今回の出来事の中で、一番、キリスト者として良かったなと思うことは、「善きサマリヤ人」のたとえをすぐ思い出すことができたということです。あらゆる違いを超えて、しかも対立を超えて善き隣人になる。それが「神の国」を目指す「シャロームの道」であるという、はっきりした視点が与えられている点で、キリスト者として行動するということの意義がある。その代わり、地の塩、世の光であるわれわれが、歴史の中で、特にコンスタンティヌス大帝以降、キリスト教のパラダイムが本当に大きく変わってきて、キリスト教がいつのまにか帝国主義の宗教になったという側面があるという歴史的反省を十分しないで、今回の出来事をイスラムを貶めるようなかたちで考えるならば、それは多分違うだろうと思っております。



## 発題者の間の討論

コーディネーター

3人の先生方の発題を頂きました。最初の浜田先生は10年にわたるアフガン難民のための学校経営というサイドから非常に貴重な現場の報告も頂戴しつつ発題を頂きました。宮脇先生は、今の情勢の情報分析というところから入られまして、非常に象徴性の高い出来事ということでお話をなさいましたし、また最後には、哲学的な内容と通ずるんですが、国際社会における正当性の問題という難しい問題提起もなさいました。最後に東條先生が、経済学を修めて来られた立場から、また大変興味深かったのは、マルクス主義、岡本公三の日本赤軍などの例を出されまして、そのような革命について私たちはある程度知識があるし、ある程度の位置付けができるけれども、似たような「革命」であるが、今回のビンラディン「革命」が一体何を狙っているか見てこないという、ひとつの問題提起をなされたわけです。東條先生が色々まとめて下さったことと、宮脇先生の発題されたことを踏まえて、浜田先生、何か付け加えることがありましたら、どうぞ。

浜田氏

タリバーンのほとんどの人々はたいていパシュトゥン族なのですが、今回パキスタンへ行き、パシュトゥン族以外の人の話を聞いたときに、「テロを行うのは皆パシュトゥン族だ」と言いました。テロリストは皆ああいう（タリバーンのような）人間だという言い方をするのは大きな間違いでして、タリバーン・イコール・テロリストではない、それをどこかで間違ってタリバーン・イコール・テロリストというような理解を持つてしまっているところがあるのではないかと思います。純粋に彼らはイスラム教国を作りたいだけである。先程お話しましたマドラサを出した人々が政府を作っているわけですから、この大臣たちの中には、自分のサイン位しか字が書けない人がいます。そのような人が、アメリカがどこにあって何をしているか分からぬわけです。要は、彼らは自分たちの国の中に平和なイスラム社会ができればいいというふうにしか思っていません。そのような中で不幸なことにビンラディンと関わりを持ってしまった。アメリカがビンラディンの引渡しを要求していましたが、それに応じないために早くから国連などの援助がストップしていました。そ

ういう中で、ビンラディンと早く手を切ったほうがいいというような動きは早くからアフガニスタンの中にあったということです。ですから、テロリスト・イコール・タリバーンでないということを知つていただければと思います。

そして、私はビンラディンのことは良く知らないですが、何を何から解放したいのかという実体が見えないわけですけれども、確かにそのようなこともあると思いますが、要するに「アメリカが憎い、ぶん殴ってやりたい」という思いも、ひとつあると思います。ある意味では、そこに「革命」を起こそうというほど思想化されていないかもしれません。ビンラディンというのは報道されていますように、かつてアメリカから援助を受けて、イスラムの戦士として、共産主義政権に対してアフガニスタンと一緒に戦った。アメリカの訓練を受けたし、援助されてきたのです。しかしアメリカは自国の益が無いと見たらこれを見捨ててきました。いいように扱われてきた——そういうことを言う人は他のアフガン人の中にもいますけれども——そういう扱いを「アメリカにされた」ということを感じている人々がアメリカに対する怒りを持っているのではないかと思います。

コーディネーター

パシュトゥン人が持っている部族的な習慣と言いますが、ものの考え方はローカルなもので、国際舞台でなかなか分からぬですし、われわれも分からぬですが、例えば、やられたらやり返すのが当たり前と考えられているのかどうか。彼らとの長い付き合いの経験から、付け加えていただけますか。今、「アメリカが憎い」とひとことで表現されましたが、そうすると、とことん、どんなことをしても、殲滅されても、最後の一人になってもテロリストとして立つ、そのようことが本当にあり得るのか。

浜田氏

パシュトゥンの中には、「パシュトゥ・ワーリ」というパシュトゥ族の掟があります。パシュトゥン族の中では、これは時と場合によってはイスラム教よりも上に来る、そのほうが優先されることあります。それは、客人をもてなさなければならない、というようなものがひとつあります。命を賭けても守らなければならぬ。そのことが、「ビンラディンを

渡すな」と言うことの一つの理由と考えられる。部族の恥になるわけですね。また、復讐という習慣があります。やられたら、必ずやり返さなければいけない。自分たちの代でできなくても、それは孫の代、その次の代でやり返さなければいけない。そうでなければ自分たちのイエの恥になるというような習慣がありますから、アメリカがどこにあるか全然わからない人たちも、今回もうアメリカがどういう人たちかよく分かったと思いますけれど、それに対する報復はずっとこれからも続いていく、そういう意味ではテロが終わることはない、ということであるかなあと思います。

#### コーディネーター

今、彼らの習俗ということで「イエ」という言葉がでてきたんですが、日本の場合、「イエ」組織や、そういうものがあって、例えばキリスト教宣教という視点からも「イエ」構造が問題とされたりしますけれども。ひとつは、そういう長い習慣の中で育まれてきたローカルなもの、そしてある意味では非常に伝統的で良いものもまたその中にあるということが、最近、文化人類学などの視点から言われてきているわけですね。しかし、一方で、今日の宮脇先生、そして東條先生が問題にされましたか、近代化というどうしようもない大きな波、この300年間、発信地は西洋ですが、それが世界中を覆った。この近代化というものと、「イエ」組織というようなものはどこかで折り合いをつけなければいけないわけで、古い良い伝統もまた、近代化していく中で良いものを残しつつ変容していくという面があるだろうと思うので、その辺の問題ですね。今、あまりにも違うグローバルなハイテクの世界にパシュトゥンという人々が生きているというのは良く分かったんですが、そういう近代化との関係で、宮脇先生、何か一言付け加えていただけますでしょうか。

#### 宮脇氏

それと関わるかどうか分からんんですね——近代化というのは非常に多様な側面があると思うんですけども——今、用意していましたのは違う問題で…。

#### コーディネーター

はい、それでも結構です。

#### 宮脇氏

では、多少は、その問題も絡めて。3つのポイントを挙げたんですが、それもある程度、素朴な形ではありますが私の聖書理解を基礎においたものであります。1番目の「多様性」と「象徴の幅広い共有」というところですが、多様性という問題は、素朴に

言えば、創世記11章に出てくるバベルの塔を意識したわけです。人が何かしらの観念で一致した大きな運動を生み出して天にまで上げられようと努力するときに、そこにはやはり分裂が起こってくるだろうということです。そのことを1番目のところで意識しました。これはある意味では、2番目のポイントの象徴の面にも関わるんですが、默示的な二元論、つまり默示録や、その他預言書などにも出てくる正しい勢力と間違った勢力の二元的な対立を、そのまま——默示というのは象徴性を含んでいるわけですが、それを象徴として捉えないで——現実の問題に単純に二つに分けて当てはめてしまうことがあると思いますが、それに対して批判的であるべきだというのが、私の考えの中にあるわけです。創世記11章的な多様性という、つまり、相対的善ということも最後に出て来ましたけれども、それは、やはり、創世記11章のことを言っていると認識して指摘したわけです。

近代ということに関連して言いますと、2番目に挙げました、「象徴」をめぐる争いということですけれども、これがなぜ問題になるのかと言いますと、やはり情報化という問題があると思います。旧約聖書、新約聖書の世界が、どんなに交通や情報の発達という面を持っていたとしても、やはり、例えば国家と言う場合でも比較的限られた範囲であり、足で周って、顔と顔を合わせて見た人々の関係の中で語られていく預言であったりするわけですが、今の時代においては、もっと情報の範囲が、知ることのできる事柄の広がりも、錯綜しているわけです。その中で、神は、新しい形で聖書のような啓示を与えて下さっているわけではない。その中で、しばしばキリスト教会では、教会の預言的役割ということを言いますけれども、旧約聖書や新約聖書の時代の預言的役割というものを現代の複雑な社会の中では単純には当てはめられないということは、やはり確認しておかなければならぬと思うのです。先程東條先生が「悩み多そうですね」と仰ったのですが、いかに難しかったということをお伝えしたかったわけです。キリスト教会では、しばしば二元論的な、善と悪によってばさっと切ってしまうというような考え方方が導入されてしまいやすいところがありますが、しかし、それをするのは神様の役割であって、私たちは、原理的にはいろいろ切れる、原理的には善悪を語れることがあるかもしれませんけれども、現実に起こっている政治や社会の現象は、罪にまみれた中で複雑な関係を持っている。そのことを、やはり私たちは忘れてはならないのではないかと思いながらこの

ような発題をさせていただきました。

#### コーディネーター

ありがとうございました。東條先生の発題の中に、近代との関係と、近代世界がその中に絶対的不正義を包み込んでいるのではないかというふうな疑問と同時に、市場経済原理主義を現代において徹底的に体現している国がアメリカだということも指摘されました。アフガンの情勢やパシティウンなど、ローカルなお話を聞いてみて、近代原理、市場原理主義うんぬんということと今回の問題について、先生は、どういうふうに折り合いをつければいいとお考えですか。

#### 東條氏

私もレジュメをお配りしていますけれども、近代という世界は、非常に読み解きにくいですけれども、わりあいはっきりしている体系です。それは、まず、歴史上初めて国家というものが主権を持ったということあります。御存知のごとく、主権というのは、まさに、カルヴァン神学が非常に重視することでありまして、主権は神のみに属するということあります。神の主権を、神のいわば代理として自分が担う——王権神授説であります——、そうでない場合は、自分たちが主権を創り出す。その中には人民主権論もありますし、いろんな主権論がありますが、そういう「主権」によって、あらゆるものを合理的に、人間の命から、戦争に至るもの全てを決定していく、当然、その中に属する生活者の福祉まで国民国家が作っていくんだという、はっきりした方向です。この点においては、近代世界は共通したものがあります。歴史は近代以降、現代でもそうですし、多分、ポストモダンのこれからも、こういう主権的な国民国家で行くという点は基本的には多分変わらないでしょう。

しかし、主権的国民国家というものをうまく作動させるためには、やはり、ひとつの「社会」が必要だった。それが「市民社会」というものなんですね。それは、人間の所有権、人権、そういうものをベースにしながら、自由・平等を原理とする法体系、議会制民主主義的な政治システム、経済的には営業の自由に基く企業、交換の自由と正義に基く市場原理で豊かな生活も作り上げていくという考え方だったわけです。それを「市民社会」と言っております。この市民社会を作ることが非常に難しいんです。ヨーロッパであっても、今、全世界を見ますと、国民国家の中に市民社会をうまく取り込んだ、もしくは作れたところは、例えばイギリスやアメリカですが、フランスでさえフランス革命の時、初めて試みられ、

それ以降もその進み方は遅々たるもので、ドイツに到っては、第2次世界大戦以降であった。日本も同じであります。

市民社会というものの、ある非常に重要な領域が市場であります。たとえというならば、市民社会の目玉が市場です。しかし目玉だけを取って個々に置くというのはグローバルであります。アメリカが今進めている市場原理主義というのは、唯物主義、マンモン主義です。全体としての市民社会——人間の所有権や公共性といった、もっと大きい近代社会的なもの——を重視するよりも、市場だけを前面に出してきます。それが第2次世界大戦後、特に現在の第三世界を叩くときの基本戦略になっている。フォードの社長だったマクナマラを中心にして、世界銀行あるいはIMFの考え方というのは、要するに、発展途上国を押さえるためには、共産主義革命が出てくる根っこを作らないようにすればいいと。それには、やはり市場主義がいちばんよいと言っているわけです。

しかし、そうは行かない。まさに部族原理で生きている所は、世界中そうですね、部族が国民国家にうまく転換できた所はよろしいんですが、転換できないで途中で挫折した所は全部悲惨な状態あります。ましてや、市民社会を作っていくということは、さらに難しいことがあります。国民国家という枠組を超えて、市民社会原理でなんとか民族主義という構造的な罪の時代を生きていこうとして成功しつつあるのがヨーロッパです。EU統合だけが、ある意味で国民国家という枠を突き抜けて、ヨーロッパ市民社会——ヨーロピアン・シトワイヤン（European citizen）という言葉を使っておりますけれど——を形成しつつあります。やはり部族原理では、近代の主権的国家原理で動いている状況では、あらゆる意味で対抗できない。ですからビンラディン的な形にもなってくるんですけども。しかし、これはもう勝ち目が無い、近代は克服できないということあります。

さらに、西洋も含めて、ではどういうふうにグローバル時代の「共に生きる」生活世界の歩みを進めたらいいかということありますけれども、それは稻垣氏が先程仰ったように、さしあたって「市民」、citoyen（公共性市民）という言葉であります。まさに「市民原理」という形で、キリスト教、イスラム教、あるいはヒンズー教、仏教、その他いろんな思想を超えて、世界的な、グローバルな形で共に生きていこうとするならば、それは、国家を超えた「グローバル市民」という概念が一番今のところ一番有

効であろうと思います。そのような大きな視点を持つことです。イスラムの人たちが近代社会の罪性の責任をキリスト教に全部もつていこうとしているのは、十字軍以来のことですが、反面、キリスト教が根づいた所のみが市民社会を発展し得た——ヨーロッパにおけるキリスト教の歴史の中にのみ——これはほぼはっきりしてきたことですが、マックス・ウェーバーの有名な指摘です。光も闇も含めてありますけれども。そういうことがありまして、近代原理、市場原理の罪性を克服していくためには、やはり、「市民社会」の枠組を作っていくかなければならぬ。しかし、アメリカのような市場原理オンリー主義的な形に行ってしまうと、少々まずいということは言えると思います。

#### コーディネーター

ありがとうございました。近代以降のひとつの大きなテーマである市民社会ということで、市場原理との関係でお話を頂いたのですが、近代の出発点に——今、カルヴァンという神学者の名前を出されて——主権の概念がある。カルヴァンは、御存知かと思いますが、神にのみ絶対に主権があるということを宣言した最初の学者ですよね。それ以降、主権概念はふたつの方向を取っていったと思います。ひとつは、その原理が有神的政治革命として生かされた形。もうひとつは、主権が根本的に人間の側に転倒して市民社会を形成していった形。後者の方は、ジャン・ボダンの『国家論』から始まって、フランス革命や、その後の共産主義革命になっていて、最終的に私たちはその結末を見ているんですが、前者の、神にのみ主権を置きつつ市民社会を形成するというのは、じゃあどういうことなんだろうということで、私はこのことをひとつの課題として『公共の哲学の構築をめざして』(教文館、2001年)という本を最近書いたのですが。

これは、私は、キリスト教の側だから、カルヴァニズムだけから、この論理が出てくるだろうと思っていたのですけれども、最近、先程紹介しましたムハンマド・ハタミ氏の本を読んでいて、やはり、このイスラム知識人が提起しているのは、実は、今私たちが議論している近代の捉え方、そして主権の捉え方、それと非常に近いことを言っているんです。そして、ここで彼が言っているのは、イスラムが21世紀に向けて、神に絶対主権を置きつつ、いわば彼の言うところの Civil Society (市民社会) を形成する原理をこれから培って行くんだと。この300年間、西洋に後れを取った、しかし西洋は堕落しているということをはっきり言っています。その西洋の堕落

というのは、先程の後者の方の「人民にすべての自由と主権がある」これゆえに西洋文明は堕落したということをはっきり言っています。私は、キリスト教の側から近代というものを分析して、やはり、ある意味では彼と同じ結論、西洋の非常に良きものを西洋そのものが既に忘れかかっている、そういう問題が非常に大きく出てきた。それが、いわば市場主義、市場原理絶対化という形で、すべてがカネ勘定でなされる、そういうふうな今の風潮を作っている。ですから、そういうことから言うと、私たちはやはり何か超越の原理というものを持たなければ、絶対に市民社会というものは形成されない。最終的には人間の側が絶対的に主権を持つという「人間絶対主義」に陥っていて、その結末はもう明らかだらうと思うわけあります。

イスラムの中にも、今のピンラディンのような極端なグループから、ハタミ氏のように、非常に穏健なグループまであるというんですが、一箇所、ハタミ氏が「革命とイスラムの未来」ということで、書いている文を紹介致します。それは、こういうところがあるんですね。

イスラム教徒の中には、イスラム教に関する頑固な思想を押し付けて、それを神の宗教などと呼んでいる者たちがいます。対立する思想を自分たちの言葉で理解する知的な能力が欠けているために、彼らはいつも狂信的な思想と行動に訴えるのです。こうした行為は、イスラム教を傷つけるばかりでなく、彼ら自身の目標達成にも繋がりません。

こういうふうにイスラム教の側から発言している知識人もいるということを、やはり私たちは、これから後、考えていく必要があるのではないかと思っているわけです。

[この後、質疑応答があったが省略]

#### 献金の会計報告

シンポジウム当日、68,810円の席上献金が捧げられ、2001年12月4日付にて全額を「燈台」へ献金致しましたことを報告申し上げます。

「共立研究」は年3回発行、定期購読は年間500円(郵送料込)です。購読ご希望の方は、研究所までご連絡下さい。

共立基督教研究所 共立研究

発行人 稲垣久和  
編集人 渡邊彰子